

今年 は 文教福祉委員会に

議会役員改選、議長は大谷氏、副議長は原田氏に

5月14、15日に市議会臨時会が開かれ、正副議長をはじめとする役職の改選が行なわれました。議長には大谷徹氏と大西克美氏が立候補しましたが、選挙によって大谷氏が選ばれました。副議長には原田勝二氏が、また監査委員には矢野仁志氏が就任しました。

日本共産党市議団の今年の役職は、以下のとおりです。

石田秀三 文教福祉常任委員会委員、議会改革特別委員会委員
鈴鹿亀山地区広域連合議長

森川ヤスエ 生活産業常任委員会委員、国民健康保険運営協議会委員
同和行政委員会委員

文教福祉委員会の所管は、教育委員会・文化振興部・保健福祉部の3部局です。

教育委員会は、いま神戸中の移転新築工事や学校耐震工事をすすめています。また、幼稚園の統廃合や中学校給食の検討委員会の議論が続いていて、今年結論が出る予定です。

文化振興部は、図書館、公民館、博物館、市民会館、文化会館などの施設や、市民展や市民マラソンなどの事業を多くかかえています。

保健福祉部は、いま問題の生活保護をはじめとした福祉、保育所や学童保育、国民健康保険や医療、新インフルエンザ対策も担当しています。

鈴鹿亀山地区広域連合は、主に介護保険事業を行なっています。平田駅前にある消費生活センターも管轄しています。介護保険事業は、今年度から認定基準や保険料などが変更されて、現場が落ち着かない状態です。議会は市議会とは別に、鈴鹿市8名、亀山市4名の議員が選出されます。

生活保護、就学援助対象者が急増

景気悪化や「派遣切り」などで苦しんでいる市民生活を反映して、生活保護の申請が急増しています。これまでは多くても月20件以内だったのが、今年に入って月40件を突破、11月～4月の新規申請合計217件、申請に至らない相談は月140件というペースです。相談の中には、失業保険が切れたら生活保護に移行するケースが、これから多く出るという見通しです。

小中学校の就学援助も増えていて、5月現在で1510人と、児童生徒数の1割近くになっています。就学援助の基準は生活保護基準の1.5倍なので、生活が苦しい家庭の多くが対象になります。いつでも受け付けていますので、気軽に学校に相談しましょう。

まだまだ「制度を知らない」「自分は受けられないと思っている」人が多くいます。皆さんの周りで困っている方がいたら、どうぞ一声かけて下さい。私どもにも、お気軽にご相談ください。

鈴西小学校校舎、柱の補強工事で

手抜き工事による柱のコンクリートの強度不足が明らかになり、昨年7月から立ち入り禁止になっている鈴西小学校の校舎、特別教室棟の調査結果と方向性が出ました。「補強で済むのか、建て替えか」については、強度の足りない柱4本に補強をするなどの工事で良いということで、これから設計にかかります。その後の工事がいつまでかかるのかは、まだ分からないとのことで、今年度いっぱい、不便な状態が続きそうです。

原因究明や費用負担、責任問題についても、見通しはついていません。

鈴鹿市後援会バス旅行にご参加を！

日時 6月28日(日)日帰り
行先 「伊那谷道中」と「元善光寺」
会費 5000円(昼食つき)子ども3000円

楽しい一日をごいっしょに過ごしませんか？
申し込みはお早めに、石田・森川まで



ルール破りの公務員ボーナスカット

5月29日に臨時議会が開かれ、市職員の6月のボーナスを0.2ヶ月削減する提案がされます（特別職は0.15ヶ月）。これは人事院の「臨時勧告」によって、国家公務員に準じて行なわれるものです。「人事院勧告」は例年、7月に民間企業の賃金実態を調査して8月に出されるもので、今回の「臨時勧告」は、まともな調査を省いてむりやり出した不十分なものです。

世間的には、不況だから公務員もガマンしろとの風潮がありますが、それに乗ってルールを無視した決め方を、当然だとする政府の姿勢は問題です。一方では「バラマキと借金、あとで増税」の補正予算、労働者の首切りを進める自動車・電機業界を税金で救済するなど、ルール無き政治が大手を振っています。政治の墮落も極まればりです。

あの北朝鮮に正しく向き合うには

4月にはロケット発射、5月には地下核実験と、北朝鮮という国は一体、何を考えているのか？日本政府や与党政治家はそのたびに「制裁だ」「先制攻撃だ」などと反応しますが、これも物騒なことです。

そんな中、蓮池透さんの「拉致」という本が出版されました。蓮池さんは「拉致被害者家族会」の事務局長として、よくマスコミにも登場していましたが、最近は顔を見なくなったなと思っていました。この本を読んでその事情が分かりました。

「救う会」の中心には、日本の核武装化や北朝鮮への先制攻撃を主張する過激なメンバーがいて、「家族会」もその影響で、北朝鮮への制裁と圧力一辺倒になってきた。対話を重視しようとする蓮池さんは、自由にものが言えなくなり、「家族会」から距離を置かざるを得なくなった、といいます。

「私が残念なのは、日本政府が、拉致問題を解決する戦略というものを持っていないことです。」「ただただ経済制裁を主張するのは、一種の思考停止です。」「政府には、結局、どうやって交渉するかという戦略がないのです。制裁を背景に交渉するだけでしたから、制裁が国際的に支持されないとすると、ほかに手段がなくなってしまうわけです。交渉しか手段はないのですけれど、交渉の窓口もなく、相手にされません。」と、蓮池さんは政府の姿勢を批判していますが、私はひじょうに的確な見方だと思います。日本は「対話と道理」で北朝鮮との話し合いを進めるべきです。

ずいそう



しみじみと人生を語る

生活や仕事に疲れてきたとき、気分転換に映画でも見て「よし、もうちょっと頑張ろうか」と思えるような、後味のいい映画が最近は少ない。が、先日見た2本の映画は、私たち中高年に元気をくれる、さわやかなものだった。

「グラン・トリノ」人生の幕をどう下ろすか

78才の主人公は、孤独で頑固な老人。朝鮮戦争に従軍し、自動車工として働いたのち、さびれた町で晩年を送っている。隣に住むラオス移民のモン族一家やアジア系住民を忌み嫌っているが、交流のなかで次第に仲良くなり、ラストはその一家を守るために命をささげる。白人中心の「正義は勝つ」ではない、人間にとって大事なものは何か、を考えさせるドラマである。ブッシュからオバマへのアメリカ社会の変化、大きな流れをそこに感じる。

「60歳のラブレター」第2の人生どう生きるか

大企業の重役を退職した夫は、妻と離婚するが、その後の仕事も生活もうまくいかない。そこへ、30年前新婚旅行で立ち寄った写真館から、二人の写真と妻の書いた「30年後の夫への手紙」が届く。しみじみとこの30年の歳月を振り返る。

毎日ケンカばかりしている魚屋の夫婦。ある日、妻に脳腫瘍が見つかり大手術となる。落ち込んだ夫が家に戻ると、妻からのプレゼントのギターが置いてある。バンドに夢中だった青春時代を思い出す。夫は病室に駆けつけ、妻の意識が戻るまで枕元で、ビートルズの「ミッシェル」を歌い続ける。

「団塊の世代」と言われ、60～70年代に青春を過ごした年代が、退職、還暦を迎えている。高度成長経済のなかで走り続けてきて、一区切りの60歳でふと振り返ってみると、何か忘れてきたような気がする。まだ老け込む年ではない、もうひと花咲かせることも出来るかも。しかし、では何をするのか？

私ももう四捨五入すると60という年になって、身につまされる。できればわが人生も、映画のようにハッピーエンドにしたいものだ。